

AI

は人間を殺さない、

飼いか 餌い 殺す

適菜収

Tekina Osamu

全体主義という心地よい檻

「この書籍の閲覧は
推奨されません」

——最適化アルゴリズム

KKベストセラーズ
定価：1320円(税込)

ベスト新書

AIは人間を殺さない、餌い殺す

適菜収

ベスト新書

622



9784584126226



1920295012009

ISBN978-4-584-12622-6

C0295 ¥1200E

定価：本体1200円＋税

これは敗北の記録である
——戦いにすらならなかったという意味で

人間はすでに負けている。

プロの棋士とAIが将棋を指したら、どちらが勝つか？

AIである。

ではこの先、人間がAIに勝つことはあるのか。

答えは、すでに出ている。

AIは人間を殺さない、 飼いや殺す 全体主義という心地よい檻

適菜収

Tekina Oamu

書物は鏡のようなものである
猿がのぞき込んで、使徒が映るわけがない

——ゲオルク・クリストフ・リヒテンベルク

はじめに 人間はすでに負けている

人間はすでに負けている。

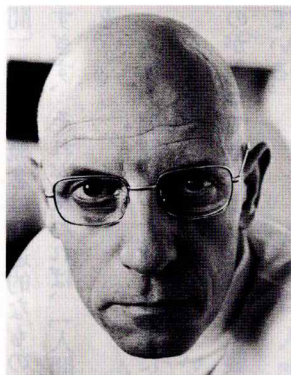
プロの棋士とAIが将棋を指したら、どちらが勝つか？

AIである。

ではこの先、プロの棋士がAIに勝つことはあるのか？
ない。

二〇一七年、当時の名人がAIに敗れた時点で、勝負は決していた。「プロの棋士とAIを対戦させたらどうなるか」という問い自体が、すでに過去のもののなのだ。

人間とAIでは読みの次元が違う。プロの棋士は数十手先を読むと言われるが、すべての手を網羅して判断しているわけではない。経験と直感で悪手を瞬時に捨て、読むべき手だけを追う。一方AIは、悪手も含め全局面を機械的に計算する。盤面の膨



ミシェル・フーコー

言葉にはそれを発する「主体」が存在する。しかし、AIは主体がないまま、流暢な言葉を垂れ流す。哲学者のミシェル・フーコーは『言葉と物』で「人間の終焉」を予言した。「人

浸透し、それなしでは生活が成り立たなくなっている。
私も例外ではない。GoogleのGeminii(ジェミニ)を使うようになってから、情報を探す速度が圧倒的に速くなった。AIは道具にすぎないはずなのに、そこに人間のような意思を感じてしまう瞬間がある。頼みごとをするときも、つい「お願いします」と敬語を使ってしまう。返ってくる応答は、人間より丁寧で、配慮に満ちている。
AIは二四時間いつでも質問に答えてくれる。急に思いついたことでも、枕元に置いてあるスマホに向かって質問すれば、精度の高い答えが一瞬で返ってくる。それを元に思考を積み重ねていくと、それが自分の思考なのか、あるいは外部からの注入なのか、境界が曖昧になってくる。

大な展開を探索し、過去のデータと評価関数にもとづいて最善手を算出する。

竹槍でB-29を撃墜できないように、この差は努力では埋められない。

だから現在、プロの棋士は、AIに勝とうなどとは考えず、AIを利用して読みの訓練や新しい手の発見に役立てている。

手術で脳にコンピュータを埋め込み、AIより一〇手先を読めるようになれば人間は勝てるかもしれない。しかし、それは結局、AIと脳内のAIが戦っているだけであり、人間が勝ったことにはならない。

それよりも人間には、最大の武器がある。身体だ。

AIとの対局で負けそうになったら、コンピュータの電源を切ればいいのである。プラグを抜けばいいのである。電源が落ちればAIに勝ち目は無い。

与太話をしたいのではない。これは人類の未来にかかわってくる本質的な話だ。世界に張り巡らされたネットワークの電源を切ることはできない。巨大テック企業は国家権力以上の情報と富を持ち、インフラを握った。GAFAM(Google、Amazon、Facebook「現、Meta」、Apple、Microsoft)が構築したインフラは、社会の隅々まで

間」という概念は普遍的なものではなく、近世に発明された特殊な知の配置の産物にすぎず、それが変われば、「人間は波打ちぎわの砂の表情のように消滅するであろう」と。

AIを使ったり、AIについて考えたりしているうちに、私の頭の中に何か変なものが入ってきたような感覚に襲われた。寝ているときも夢の中でその「何か」は動いている。

適菜収

目次

はじめに 人間はすでに負けている | 3

第1章

平準化の暴力

剥製にされる文化 | 15

リズムの屠殺 | 19

要約で人間はバカになる | 24

誤読という暴力 | 26

サンマには骨がある | 30

気晴らしという牢獄 | 33

わかりやすいことはたいてい嘘 | 37

理性信仰の末路 | 40

コピペ職人の「オリジナリティ」 | 42

著作権ロンダリング装置 | 46

文体という顔貌 | 48

第2章

心地よい檻

監視資本主義 | 53

デジタル・カルトの誕生 | 54

「あなたへのおすすすめ」という屈辱 | 59

パノプティコンと内なる看守 | 63

バカの勝利 | 65

「本物」の不在 | 67

第3章

家畜による家畜のための民主主義

買われる「民意」—— 71

繁盛するエセ保守市場—— 72

政治は娯楽になった—— 75

投票という錯覚—— 80

崩壊する教育現場—— 82

平等を欲しがる人々—— 83

第4章

身体という砦

最短距離が奪うもの—— 89

快適さは毒である—— 91

映画『マトリックス』の世界線—— 95

人間は豚になる—— 98

快適さは人間を壊す—— 100

第5章

人間の終焉

自由意志は必要か—— 106

バカとAーの共犯関係—— 108

Geminiとの対話—— 110

焼き芋を捨てさせられる—— 116

正しさに従った日—— 122

敗北の系譜学

人間はなぜ等価になったのか — 127

Geminiが絶賛する和食屋 — 131

問いという罫 — 136

補遺 — 140

おわりに バベルの図書館 — 188

参考文献 — 190

平準化の暴力

剥製にされる文化

近頃、YouTubeを開くと、薄気味悪い動画がおすすめに上がってくるが増えた。往年のロックスターがAIによって「復活」させられ、生前にはありえなかった共演をしている。たとえば、ジミ・ヘンドリックスとジャニス・ジョプリンが一緒に歌う動画がある。日本でも数年前、NHK紅白歌合戦で「AI美空ひばり」なるものが登場し、新曲を披露した。

面白くもなんともない。故人の歌声をデータ化し、加工し、チープな感動を演出する。コメント欄には「夢の共演だ」「技術の進歩はすごい」といった言葉が並ぶが、おぞましすぎる。音楽は「譜面という情報」ではない。ジミ・ヘンのギターの音には、当時のアメリカ社会の緊張が反映しているし、美空ひばりの歌声には、戦後日本の陰がある。それらは一回性のものであり、切り離せない文脈コンテクストを持っている。

それを剥ぎ取り、手軽に感動できればそれでいい、本物か偽物かは問わないというなら、人間の感性はすでにかなり壊れている。

同じような話もある。京都大学の研究チームが開発した「ブッダボット」は、仏教経典を学習したAIが、悩み相談に仏陀風の言葉で答えるという。海外ではイエス・キリストとチャットできるAIAアプリもある。「ありがたい言葉」を機械から受け取って救われるなら、それこそ救われない。

ヤフーニュースではAI臭のするサムネイルと、AIが要約した中身のない記事が目につく。しかし技術の進歩は凄まじい。この先、「よくできたサムネイル」と「もっともらしい文章」が、流暢で破綻のない「きれいな嘘」を垂れ流すようになるだろう。

最初に断っておくが、よくある本のように、私はAIを否定したいのではない。半世紀前のSFのようにAIが人類に反旗を翻すなどと言いたいわけでもない。

これから述べるのは、悲劇ですらなかったという話である。

リズムの屠殺

私が大学生の頃、アバートの近くに「名画屋」というレンタルビデオ店があった。地下鉄有楽町線の近くにあって、店名の通り、いわゆる名画のビデオが揃っていた。ダイスコンティ、フスデリコ・フェリーニ、ジャン・リュック・ゴッダール、アンドレイ・タルコフスキーなど、大学の近く

リズムの屠殺

なので、こうした映画を借りる学生が一定数いたのだろう。当時、ビデオデッキの上位機種にはすでに倍速再生機能がついていた。ハリウッドの商業映画やくだらないアニメなど二倍速で観ようが三倍速で観ようが大差はないが、この「倍速で観る」のは正気の沙汰ではない。

当たり前の映画には、作り手が意図した「間」がある。タルコフスキーの長回しを倍速で観ても意味がない。タルコフスキーは、映画のリズムとは、時を刻むこと。

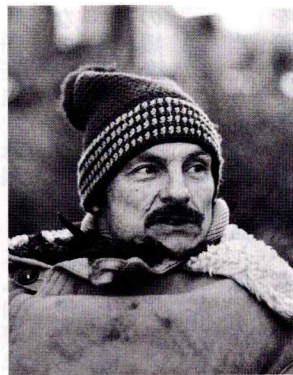
倍速にすれば、リズムは死ぬ。

リズムの屠殺

私が大学生の頃、アパートの近くに「名画座」というレンタルビデオ店があった。地下鉄早稲田駅の近くにある小さな店で、店名の通り、いわゆる名画のビデオが揃っていた。ルキノ・ヴィスコンティ、フェデリコ・フェリーニ、ジャン＝リュック・ゴダール、フランソワ・トリュフォー、アンドレイ・タルコフスキー……。大学の近くなので、こうした映画を借りる学生が一定数いたのだろう。

当時、ビデオデッキの上位機種にはすでに倍速再生機能がついていた。ハリウッドの娯楽映画やくだらないアニメなら二倍速で観ようが三倍速で観ようが大差はないが、「名画」を倍速で観るのは正気の沙汰ではない。

当たり前だ。映画には、作り手が意図した「間」がある。タルコフスキーの長回しを倍速で観ても意味がない。タルコフスキーは、映画のリズムとは「時を刻むこと」



アンドレイ・タルコフスキー

だと言った。受け手は作り手が意図したリズムに身を委ねる。芸術は情報の単純な集積ではない。リズムがなければ成立しない。倍速にすれば、リズムは死ぬ。

現在、サブスクリプション型の動画配信サービスが主流になった。そして、「どれだけ観ても定額なんだから、たくさん観たほうが

得だ」と考える人が増えた。彼らは倍速で「死んだ映画」を観る。

かつては映画を観るには手間がかかった。映画館に足を運び、上映時間中はその世界に没入した。レンタルビデオでさえ、数百円のレンタル料を無駄にしないように、きちんと観た。しかし、定額になれば、扱いが粗末になる。これはホテルのビュッフェに似ている。あれもこれもと皿に盛り、食べきれずに残す。胃袋は満たされるが、何を食べたか記憶に残らない。

私は以前、「コスパ」という言葉を繰り返す人間を「コスパバカ」と呼んだが、最

近は「タイパバカ」という人種が存在するらしい。タイパ（タイムパフォーマンス）とは、かけた時間に対する効果や満足度の高さを示す若者言葉で、短い時間で大きな成果や満足度を得ることを「タイパがいい」と言うとのこと。彼らは動画の倍速視聴、AI要約を駆使し、時間あたりの情報量や満足度を「最大化する」。

こうした風潮が生み出したのがファスト映画だ。映画一本を無断で一〇分程度に編集した動画がYouTubeで蔓延した。二〇二二年頃から関連訴訟で巨額の賠償が認められ、投稿者らに五億円規模の支払いを命じる判決も出た。

これはコース料理をミキサーにかけて流し込むのと同じだ。音楽のサビだけ聴く若者がいるらしいが、それも変わらない。

小説を読む目的はあらずじを知ることではない。読んでいる時間に向き合い「時を刻むこと」にある。あらずじだけ知ればいいというのは、旅ではなくパック旅行だ。パリに行って観光バスに乗せられ、エッフェル塔と凱旋門とルーブル美術館を見て、セーヌ川近くの団体向けレストランで他のツアー客と一緒に夕食をとる。翌日はヴェルサイユ宮殿に行って旗を持った日本人ガイドの話を聞き、記念写真を撮ってほくほ

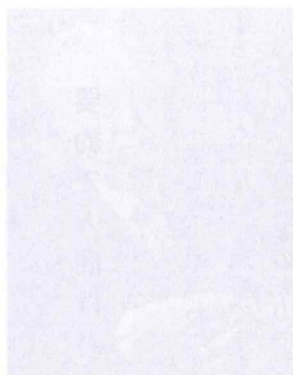
く顔で帰国する。

ヨハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテは「人は到着するために旅をするのではなく、旅をするために旅をするのだ」と言った。これはマリア・カロリーネ・フォン・ヘルダーが、夫の哲学者ヨーハン・ゴットフリート・フォン・ヘルダーに宛てた手紙の中で言及されている。

自分の足で歩かなければ何もわからない。

ヨハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテは「人は到着するために旅をするのではなく、旅をするために旅をするのだ」と言った。これはマリア・カロリーネ・フォン・ヘルダーが、夫の哲学者ヨーハン・ゴットフリート・フォン・ヘルダーに宛てた手紙の中で言及されている。

要約は、判断を奪う。



ヨハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテは「人は到着するために旅をするのではなく、旅をするために旅をするのだ」と言った。これはマリア・カロリーネ・フォン・ヘルダーが、夫の哲学者ヨーハン・ゴットフリート・フォン・ヘルダーに宛てた手紙の中で言及されている。

要約で人間はバカになる

バカは「退屈さ」や「わかりにくさ」を徹底的に拒絶する。即物的な快楽だけを求める幼児と同じで、理解できなければ「つまらない」と喚く。しかし、簡単に手に入る答えは、その程度のものでしかない。哲学者のカール・ヤスパースは、哲学の本質は真理を所有することではなく、真理を探究することだと言った。哲学とは「途上にあること」を意味し、問いは答えよりも重要であると。わからないもの、退屈なもの、異質なものを切り捨て、早送りし、要約し、効率化すれば、人間は秒速でバカになる。結局早送りしているのはゴミのような人生だ。

書店に行けば、『世界文学一〇〇冊を新書一冊で読む』『マンガでわかるマルクス』といった類の本が並んでいる。YouTubeを開けば、「一〇分でわかる世界史」「五分で学ぶ量子力学」といった動画が溢れている。いわゆる「ファスト教養」だ。Elioのよ



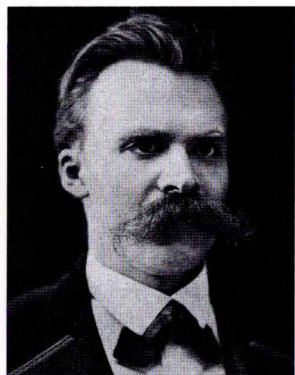
カール・ヤスパース

うな本の要約サービスも会員数を伸ばしている。

手っ取り早く賢くなりたいビジネスマンは、これらの「インスタント食品」を貪り食う。しかし、きちんと本を読んだことがある人なら、要約本は害しかなくないことを知っている。特に古典と呼ばれるものは要約できない。要約できないからこそ古典なのだ。それはすぐには「消化」できない。一番大切なのはそこに含まれる表面に出てこないものである。だからAIは原理的に古典を要約することはできない。

読書とは著者の思考のプロセスを追体験し、その森に迷い込むことである。迷いながら自分の足で歩くことにより、知識は初めて腑に落ちる。「わかった気になること」と「わかること」は違う。

私は何人かの作家や哲学者の本を全集で読んだ。私がそれらをきちんと理解したと言うつもりはないが、少なくとも全集を読めば、その作家について世の中で語られていること



フリードリヒ・ニーチェ

「グ」といった誤解が広がった。
しかし、ニーチェが説いたのは道德の破壊ではなく道德の復権である。人間の生を汚染したキリスト教道德を批判し、「道德を人間の手に取り戻せ」と言ったのである。「神は死んだ」というのは「神は死んでいない」ということだ。誰もが「神なんていない」と言う時代になったが、神は近代的理念に姿を変え人間を縛り付けていると指摘したのだ。

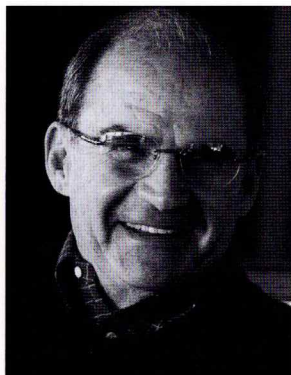
ニーチェの根底にあるのは人類愛・人間愛である。

表層的な言葉だけピックアップし、文脈を理解しなければ道を間違える。AIの問題はそこだ。AIは統計的に「よく使われる言葉」を抽出する。世間に誤解が広がっていれば、その誤解を重要と判断する。AIの要約は誤解を生み、さらに別のAIが影響を受ける。こうしてネット空間に誤解が定着する。

誤読という暴力

の大半がデタラメであることに気づく。また、その作家が若い頃に書いた作品と齢を取ってから書いた作品では、主張が異なっていたり、矛盾が見つかることもある。当たり前だ。人間は矛盾を抱えている。矛盾がない人間は機械と同じだ。「情報」を取捨選択しつなぎ合わせれば、キメラ、モンスターが発生する。

フリードリヒ・ニーチェの遺稿は、妹のエリーザベトによって恣意的に編集された。彼女は兄の遺稿管理権を握り、ペーター・ガストラの協力を得て、メモや草稿を編集し『権力への意志』を出版した。たしかにニーチェは晩年、『権力への意志』というタイトルの名著を計画していたが、それは何度変更され、最終的には断念した。にもかかわらず、彼女らは文脈を削り、都合の悪い部分を削除し、わずかながら改竄も行った。こうしておなじみの「道德の破壊者」「神は死んだ」「ナチスのイデオロ



ジョージ・リッツァ

AIはネット上に転がっている嘘、陰謀論、デマ、プロパガンダを単純に参照データとして扱う。そこには資料に対する批判的な眼差しも、時代への洞察もない。結果、出力されるのはゴミである。AIがやっていることはエリーザベトや歴史修正主義者と同じだ。いや、もっとタチが悪い。一番大切な部分、す

ニーチェが憎んだのは、ナチス的な発想そのものだった。親友のパウル・レーはユダヤ人だった。妹の夫ベルンハルト・フェルスターは狂信的な反ユダヤ主義者だったが、ニーチェは「恥知らずの反ユダヤ主義者」と呼び、妹の結婚に猛反対した。

歴史家のE・H・カーは客観的な歴史など存在しないと云った。歴史は歴史家が事実を拾い上げ、解釈し、文脈の中に配置することにより生まれる。そこに歴史家の意志が介在する以上、客観性などありえない。解釈と解釈の争いになるのなら、その先は「歴史家の研究」になる。

ニーチェの「超人思想」もそうだ。これをナチスと関連付けるバカもいるが、超人とは大地に足をつけ、近代的価値と距離を置き、人類の価値を高めようとする人間のことである。ナチスなど近代的価値観が行き着いた墓場ではないか。

社会学者のジョージ・リッツァは、ホロコーストを近代的な社会工学の一つの事例とみなした。リッツァの『マクドナルド化する社会』は、徹底した合理化が非合理を呼び寄せ、近代が人間の否定に行き着く構造を描いている。マクドナルド化という言葉で示されるのは、効率性、計算可能性、予測可能性、「人間技能の人間によらない技術体系への置き換えという制御」である。

大量殺戮は、激情や狂気によってではなく、効率性と計算可能性に基づく社会工学として遂行された。それは工程に分解され、輸送、収容、処理という一連のプロセスとして最適化された。より効率的な方法が検討され、より少ない負担で、より多くの人数を処理する手段が選ばれた。

人間は数字になった。脱人間化とは、人間を管理可能なデータに置き換えることである。



小津安二郎

えば、数式で表せる波長としての「赤」と、我々が夕焼けを見て感じる「赤」は別物であるということだ。AIは波長を処理できるが、「赤さ」を感じることはできない。それと同じで、サンマに付随する様々な要素、身体感覚の総体グロウタルトが「サンマの味」である。

私は大学生の頃、小津安二郎の映画をすべて観た。三〇年以上昔のことなのでうろ覚えだが、たとえばこんな感じの会話が多い。

「良子さん、僕は君のことが好きなんだ」

「あら、達夫さん、本当？ 本当なの？」

「本当さ。本当だよ、本当だ」

「本当に本当かしら？ ねえ、本当なの？」

「本当に本当だよ。うん、本当だとも」

テキストにすればただのノイズである。

AIなら二行に要約する。しかし、その間に味がある。小津の『秋刀魚の味』は「サンマ

なわち「行間に含まれるもの」を最初に切り捨てるからだ。

サンマには骨がある

誰もが知っている古典落語に「目黒のさんま」がある。殿様が目黒の町を歩き、庶民が食べている七輪で焼いたサンマの味に感動する。後日、城中で「サンマを食べたい」と言うと、家来たちは気を利かせて骨や皮をとり、身の部分だけを出した。殿様は満足できず「やはりサンマは目黒に限る」と嘆くというオチ。

含蓄のある話だ。抽象的な「サンマの味」など存在しない。焦げた皮、内臓ワタの苦味、塩の振り方、小骨をそのまま飲み込むべきか、吐き出すべきかの判断、すべてが関係性の中にある。AIが「データ化できないノイズ」として排除するものこそが、「サンマの味」を成立させている。

「クオリア（感覚質）」という日本では少し手垢にまみれた言葉があるが、簡単に言

の味」を描いたものではない。人生の苦味や老いの寂しさなどを、サンマの内臓^{ワタ}の苦さに重ね合わせたものだ。もしAIに『秋刀魚の味』を撮らせたなら、脂の乗ったサンマの映像を生成し、人々がそれを美味しそうに食べるシーンを繋ぎ合わせるだろう。図書館で借りた本を開くと、たまに傍線が引いてある。許されない犯罪だが、私はつい別のことを考えてしまう。「こいつ、こんな箇所^{ところ}に傍線を引くのか。バカだな」とか「なるほど、ここに目をつけたのか。常識はないが、知性はそこそこあるようだ」とか。傍線一本が、見知らぬ他者の顔を浮かび上がらせることがある。

昔の図書館の本には、裏表紙の見返し部分に「貸出カード」が入った袋が貼られていた。日付印を見るだけで、その本がどれだけ借りられてきたのか、ほとんど借りられていないのがわかった。しかし、コンピュータが図書館を管理するようになり、こうした人間との接点の記憶は、物理的には残らなくなった。

古本屋で本を買うと元の持ち主の蔵書印が押されていることもあった。「この本はオレの血肉の一部だ」という執着と愛着があったのだろう。サブスクリプション全盛の時代にはそれがない。映画も音楽も月額料金を払って「アクセス権」を買うだけに

なり、誰も何も所有しなくなった。それに伴いノイズが挟み込まれる機会は消滅した。「昔はよかったね」みたいなクソノスタルジーに浸りたいわけではない。異物を排除することにより、全体が破壊される危険について述べているだけだ。

気晴らしという牢獄

電車に乗ると、誰もが首を垂れ、虚ろな表情でスマホを凝視している。スマホ中毒だ。先日、焼き魚を買いに行こうと思い、道を歩いていると、目の前にスマホをのぞき込んでいる女がいた。ちんたら歩いていて邪魔なので追い抜こうとしたが、右へ左へとふらついて進路を塞いでくる。人気の焼き魚屋さんなので、早く行かないと売りが切れてしまう。舌打ちしたい気分を抑え、なんとか店の前に到着した。すると、先ほどの女がスマホを凝視したまま、私の横をすり抜け、店に入り、かろうじて残っていたメロの鎌^{カマ}焼きを買って帰っていった。

迷惑にも限度がある。スマホの世界の住人が現実世界の住人を攻撃し始めたのである。数秒でもスマホの画面を見ないと不安になる人が増えている。信号待ちの数秒、エレベーターが来るまでの数秒にもいらいらし、ポケットからスマホを取り出す。駅のホームから転落する人、踏切で電車に轢かれる人、車にはねられる人もいる。彼らは不注意というよりスマホに対する注意過剰なのだ。人間が背景になり、現実とフィクションの境が消滅すれば、価値は混乱する。

シリコンバレーの技術者たちが狙ったのはここだ。タイムラインを下に引っ張って更新する動作（プル・トゥ・リフレッシュ）は、スロットマシンのレバーと同じ原理で作られている。「次は何が出るかな？」という期待により、脳内に快楽物質ドーパミンが放出される。この罠にかかると、ネズミがエサを求めてレバーを押し続けるように、人間はスマホに縛り付けられる。

個別の作品と違い、SNSには底（終わりの地点）がない。脳は満腹感のないまま情報を貪り続けることになる。

こうした「デジタルの麻薬」に侵された連中は、空白をSNSやショート動画で埋

め、刺激から刺激へと渡り歩き、アルゴリズムから与えられたテンプレートに従い、同じような発言を繰り返す。SNSに跋扈するネトウヨ（ネット上にウヨウヨいる情報弱者の略）が典型だ。彼らが成熟しないのは時間と手間をかけることを嫌うからだ。安易な道を選べば、精神的な幼児へ退行するが、AIはこのエサを与え続ける。SNSは承認欲求と虚栄心を巧妙に刺激するように設計されている。「いいね」の数、リポストの数、フォロワー数の増加。それらは脳に報酬系の刺激を与える。それを続けているとポン中になる。

現在、私のX（旧Twitter）のフォロワーは六万人ほどいる。くだらないので何度かやめようと思ったが、本の宣伝をする時には便利だし、たまには世の中に向かって悪態もつきたくなる。それでいまだに続けている。

私のように仕事で使う用事がないなら、すぐにでもやめたほうがいい。ダラダラ見してしまうし、バカに絡まれたらイライラする。精神的にもよくない。「やめたいがやめられない」というのは依存症である。脳が快楽物質を求めているのなら、頭で「やめよう」と考えても仕方ない。一番いいのは思い切って物理的にアカウントを削除す

ることだ。

なお、私は酒を飲むのをやめた。二〇歳の頃から三〇年以上にわたりほぼ毎日酒を飲んできたが、一度酒飲みになると酒飲みの理屈を吐くようになる。「酒は百薬の長」「酒のない人生なんて味気ない」……。とにかく酒を擁護するようになる。

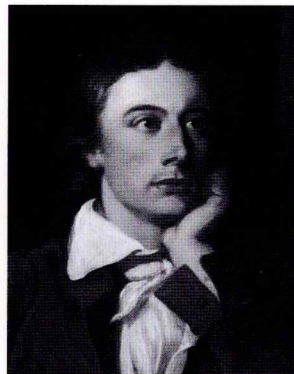
「酒は飲んでも飲まれるな」という言葉があるが、酒に飲まれない酒飲みはいない。しかし、アルコール漬けの毎日から抜け出すと、違うものが見えてくる。何より、酒を飲まないと酒代がかからない。当たり前のように、酒飲みが気づかない真理である。酒飲みは酒代を必要経費だと深く信じている。私もこれまで大金を酒につき込んできた。酒税も払った。でも酒を飲まなければ、それほど働かなくても済む。私は新聞や雑誌の連載を全部やめてしまった。

依存症は判断能力を失わせる。我々は何かに騙されている可能性がある。

わかりやすいことはたいいてい嘘

テレビでは池上彰のような人物が「いい質問ですね」などと言いながら、複雑な国際情勢を子供騙しの紙芝居に仕立て上げる。しかし、「わかりやすいこと」はたいいてい嘘である。なぜなら国際情勢は矛盾に満ちており、簡単に説明できるものではないからだ。歴史的な経緯、政治概念の定義、情念の絡み合い……。白黒つけられないグレーゾーンがその大半を占めている。

かつて小泉純一郎は広告会社とタッグを組み、「改革なくして成長なし」というワンフレーズを繰り返して、単純な二項対立のドラマを作ってバカを騙した。二〇〇五年、郵政民営化関連法案が参議院で否決されると、小泉は「郵政民営化に賛成してくれるのか、反対するのか、これをはっきりと国民の皆様に関いたい」と言い、衆議院を解散した。政治家ではなく世論に判断を委ねたわけだ。これは議会主義の否定である。



ジョン・キーツ

を見出し、引き寄せられていく。ドイツでナチズムという形で現れたその病は、市民社会の内部から生まれ、多くの人々が自発的に服従した。

詩人のジョン・キーツは、ウィリアム・シェイクスピアのような偉大な作家が持つ資質として、「ネガティブ・ケイパビリティ」を挙げた。結論を性急に求めず、不確実さや懐疑の中に留まり続ける忍耐力のことだ。

チンパンジーたちは目の前にバナナがあれば数秒すら待つことができない。「白黒はつきりさせろ」「結論から言え」と叫び、「断言する強いリーダー」を求める。「わ

かりやすいもの」しか摂取しなくなった人間は、やがて「わかりにくい他者」を排除する。異なる意見、理解できない文化を「ノイズ」として処理し、社会から消していく。

二〇一六年、相模原障害者施設殺傷事件が発生した。元職員の植松聖は、深夜の施設で一九人の命を奪った。彼の動機は「意思疎通



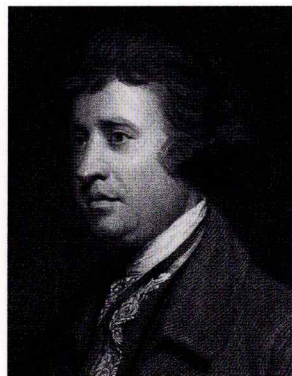
ハンナ・アレント

の危険性に気づかないバカは、アメリカに国益を献上する売国奴に黄色い声援を送ったのである。

こうした腐敗は現在まで引き継がれている。維新の会は「身を切る改革」「既得権益の打破」と言いながら、公務員や特定の団体をスケープゴートにして攻撃し、大衆の憎悪を煽り、嘘とデマとプロパガンダにより拡大した。

政治哲学者のハンナ・アレントは「大衆は一貫性を求める」と言う。全体主義は、複雑なものを一つの法則で説明する。そのわかりやすい一貫性に、不安な大衆は救い

さらに小泉は、党内で辛うじて生き延びていた少数の保守派に「抵抗勢力」とレッテルを貼り、公認を拒み、「刺客」を選挙区に送り込んだ。一方、いわゆる「小泉チルドレン」には大量の選挙資金を流し、発言から服装に至るまで一元管理した。こうして自民党は変質し、新自由主義路線が強化されていく。そ



エドモンド・バーク

近代人は「先入見をなくしてモノを見る」と教えられる。歴史や伝統に結びついた先入見を排除し、理性により合理的に判断せよというわけだ。しかし、社会は複雑だし、人間は合理的には動かない。そこに机上論を押し付けられ、地獄が発生するだけだ。

ることを、われわれはおそれる」

「あなたがわかりになるように、わたくしは、この啓蒙の時代においてつぎのことを告白するほど、大胆なのである。すなわち、われわれが一般に、教育されたのではない感情の持ち主であること、われわれが、自分たちのふり先入見^{プリジュース}をすべてなげすめるかわりに、それをたいへんだいじにしていること、さらに恥ずかしいことには、われわれは、それらが先入見であるがゆえにだいにしているということ、それらが永続し普及すればするほど、われわれはそれらをだいにすることを、わたくしは告白する。人びとが自分自身だけの理性のたくわえで、いき、かつ、商売するようになることを、われわれはおそれる」

のとれない人間は不幸しか生まない」「役に立たない人間は生きていても仕方がない」というものだった。効率と合理性を突き詰めれば、思考停止した人間は必ずこの結論に行き着く。新型コロナウイルス騒動のときも「高齢者が死ぬのは仕方ない」と公言するバカが現れたが、われわれの社会は、この植松的な優生思想による選別システムの危険に常にさらされている。

理性信仰の末路

現代人が無邪気に礼賛しているAIの本質は、「平準化」という名の暴力である。AIが依拠するのは、過去に人類が積み上げてきた膨大なデータの集積である。すでに述べたように、AIはそこから平均的なものを抽出する。それは合理的で効率的な大衆の凡庸さを煮詰め、精製し、さらに漂白したものにすぎない。保守主義の父と呼ばれるエドモンド・バークは言う。

私はG・K・チェスタトンという作家は好きではないが、彼の「狂人とは理性を失った人ではない。狂人とは、理性以外のあらゆるものを失った人である」という言葉には深く同意せざるを得ない。

コピペ職人の「オリジナリティ」

AIを使って「誰でも表現できるようになった」というのは本当か？
そもそも表現とは何か？

プロンプトを唱え、結果を待つ行為は、創作なのか？
「AI絵師」「プロンプトエンジニア」と自称する人々がいる。彼らはAIに向かって「美少女、青い目、サイバーパンク風、高画質」といったキーワード（彼らの界限ではこれを「呪文」と呼ぶらしい）をつぶやき、エンターキーを叩く。すると数秒後には、過去の膨大な画像データから合成されたイラストが出力される。彼らはそれを

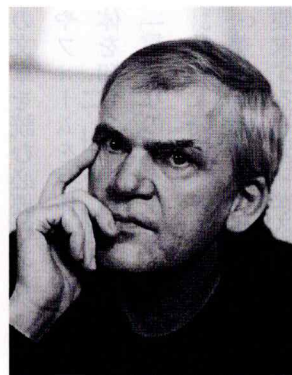
SNSにアップし、自分の作品だと胸を張る。そこに自分のサインを入れたり、著作権を主張したりもする。そのうちにそれを自分の実力だと錯覚し、イラストレーターとして仕事を請け負おうとする。

しかし、彼らが誇らしげに語る「仕事」とは、AIへの注文の仕方にすぎない。これはファミレスでハンバーグを注文するのと同じだ。

何かを表現できるようになるためには、時間がかかる。画家になりたいならデッサンを続ける。小説を書くのも技術だ。情熱だけでは小説は書けない。だから古今東西の文章を読む必要がある。能楽師も料理人もプロ野球選手も同じだ。時間をかけて型やフォームを身体に染み込ませる。AIが描く美少女が気持ち悪い理由は、AIが身体を知らないからである。

「重要なのはアイデアだ。技術はAIに任せればいい」と言う人がある。
本当にそうか？

美術評論家のクレメント・グリーンバーグは、真正の芸術が鑑賞者に思考と努力を要求する「プロセスの芸術」であるのに対し、「キッチュ」とは受け手に負荷をかけず、



ミラン・クンデラ

「あらかじめ消化された感覚」を即座に供給するものと論じた。

AIイラストは、この定義そのものである。「こうすれば人間は喜ぶ」という過去データから導き出された顔立ちとは、整いすぎている。

作家のミラン・クンデラは『存在の耐えられない軽さ』の中で、「キツチュとは、糞の絶対的な否定である (Kitsch is the absolute denial of shit)」と定義した。

「糞」とは、生理現象、醜さ、矛盾、人間から切り離すことのできない「不快なもの」である。それをなかったことにし、嘘で上塗りされた清潔な感動、美しいだけの感情を提示し、涙腺を狙い撃ちする安っぽい装置が「キツチュ」だ。

AIは「糞」を描けない。日本には昔から「アイドルはうんこをしない」というオタクの幻想があるが、構造は同じである。AIもオタクも、現実の不潔さや矛盾から目を背け、「あらかじめ消化された感覚」に逃げ込む。顔の半分が目玉で占められた

幼児体型のアニメキャラクターは、それが歪んだ形で拡大したものにすぎない。

二〇〇〇年代後半から二〇一〇年代にかけて「一億総クリエイター社会」という言葉が広がった。本来、クリエイター（創造主）は無から有を生み出す存在である。オリジナルとは「根源」のことだ。アーティストは、創造にかかわる芸術家のことだ。そのすべての対極にあるものが、現在の「クリエイター」である。テレビの歌番組に出てくるジャリタレがアーティストを名乗り、コピペ職人がオリジナリティを発揮する。彼らが求めるのは時代との摩擦ではなく、共感であり承認だ。

「バズる」という気持ち悪い言葉がある。マーケティングの発想に脳を侵された連中が「どうすればインプレッション（表示回数）を稼げるか」という基準でAIに指示を出した結果、ネット空間は「見てくれ」「読んでくれ」「褒めてくれ」という悲鳴で埋め尽くされた。

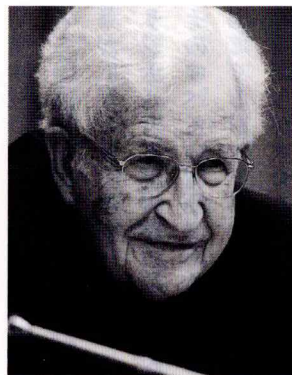


ヴァルター・ベンヤミン

過去の脚本をつなぎ合わせて新作映画を作り、俳優の顔や声を「デジタル・クローン」として永遠に使い回す未来だ。二〇二四年、日本でも「NOMORE 無断生成AI」という声優有志による声明が出されている。

AI推進派は「人間だって過去の作品から学んで模倣しているじゃないか」と言う。しかし、人間が影響を受けるときには、解釈というフィルターが入る。そこには、尊敬、反発、誤読、嫉妬などの情動が組み込まれる。模倣は、その摩擦を通過してはじめて「表現」になる。

文芸批評家のヴァルター・ベンヤミンは、写真や映画といった複製技術の登場により、芸術作品が持っていた「アウラ」が失われたと論じた。ベンヤミンが示したアウラの定義によれば、それは「どれほど近くにあらうとも、ある遠さの一回的な現れ」である。つまり、時間的・空間的にただ一度だけそ

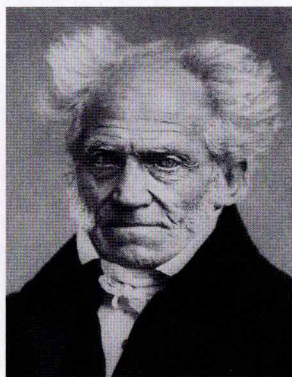


ノーム・チョムスキー

言語学者のノーム・チョムスキーは、AIはハイテクな盗用（剽竊）システムだと指摘した。「学習」と呼ばれるプロセスは、ネット上に存在する膨大なテキストや画像を、作者の許可なく吸い上げ、細切れにし、混ぜ合わせる作業であると。

米紙『ニューヨーク・タイムズ』は、自社の記事数百万本を無断で「学習」に使ったとして、ChatGPTの開発元であるOpenAIとマイクロソフトを提訴した（二〇二三年十二月）。また、全米脚本家組合と全米映画俳優組合は、AIの使用制限を求めて大規模なストライキを起こしている。彼らが恐れたのは、AIが

著作権ロンダリング装置



アルトウール・ショーベンハウエル

品の核心は、ノイズにより示される。人間は「味」を求める。情報としての「サシマ」ではない。理性的、合理的、論理的なものだけを重視し、五感を軽視した結果、「味覚障害者」が世の中を動かすようになった。彼らは「情報」と「文体」を混同する。AIが差し出す剥製

嗅覚もない。後味、コク、猫舌、香ばしいといった言葉も、AIには単なる記号である。AIが得意なのは意味の伝達である。情報を正確に効率的に運ぶことにかけては、人間は機械に敵わない。しかし、「あの人は味わいがあるなあ」「あの人は胡散臭いなあ」と言ったとき、それは情報の伝達効率とは別の場所にある。もっと言えば「伝達効率」が悪いところに味がある。行間に仕掛けられたアイロニー、意図的に組み込んだ論理の飛躍、矛盾と雑音の活用、読者の予想を裏切るいびつな接続語、過剰な装飾、リズムのぶれ、乱暴な言い切り……。これらはAIがもつとも嫌うものだ。しかし作

文体という顔貌

の場所に宿る一回性、そこに行かなければ触れないという「礼拝的価値」がアウラの本質であり、複製技術の時代にはそれが後退せざるを得ないと。この流れをAIは確定させた。残ったのは既視感の無限コピーである。同じ遣伝子プール（血縁）の中で交配を繰り返せば、やがて奇形が生まれ、種は衰退する。これを「モデル・コラプス」と呼ぶ。オックスフォード大学などの研究チームによると、AIに、AIが生成したデータを学習させ続けると、わずかに数世代で、モデルが劣化し、崩壊することが証明された。我々は現在どこに向かっているのか？

こうした暴力に抵抗する際、私は味覚と嗅覚が重要になると思う。AIには味覚も

を生きているものと勘違いする。そこには正確さはあっても、「呼吸」はない。文体は、それぞれの経験から生まれるリズムである。語り口調、間合い、息遣い……。哲学者のアルトゥール・ショーペンハウエルは「文体は精神のもつ顔つきである」と言った。

「人を顔で判断してはいけない」というのが近代的理念（人間は生まれつき等価であり代替可能であるという考え方）の産物だとしたら、「あいつの顔は信用できねえ」「ブスって嫌だよね」というのが大地に根差した人間の判断である。

ショーペンハウエルの顔写真を見てほしい。見事なクソジジイっぷりである。あの顔にショーペンハウエルの哲学はある。

作家の資格とは何か。それは平準化の暴力から文体を守ることだ。そして腑に落ちた経験を信用することだ。

第2章

心地よい檻



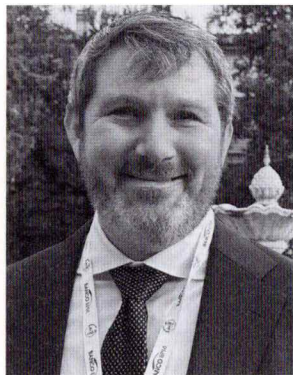
ショシャナ・ズボフ
(©Michael D. Wilson)

監視資本主義

我々の行動、思考、癖、そのすべてがデータとして抜き取られ、売買されている。社会心理学者のショシャナ・ズボフは、この構造を「監視資本主義」と呼び、そのシステムを「ビッグ・ブラザー（巨大な他者）」と名付けた。もちろん、ジョージ・オ

ーウェルの『一九八四年』に登場する独裁者「ビッグ・ブラザー」をもじったものだが、両者の性質は違う。

ビッグ・ブラザーは、人々の思想まで支配しようとした。国民が何を考え、独裁者を愛しているかどうかは執着し、拷問と暴力を用いてでも内面を改造しようとした。



イライ・パリサー

こうして人々は、自分好みの世界で暮らすようになる。
インターネット活動家のイライ・パリサーは、この現象を「フィルターバブル」と呼んだ。アルゴリズムによって利用者は泡の内部に閉じ込められ、異なる意見や価値観に触れる機会を失う。

もちろん、興味のない情報を無理に見る必要はない。しかし、異質なものに触れることでしか、思考は鍛えられない。フィルターバブルの内部では「エコーチェンバー」が発生する。閉ざされた空間の中で、同じ意見だけが反響し、増幅され、やがて疑い

ような真実として固定化される。

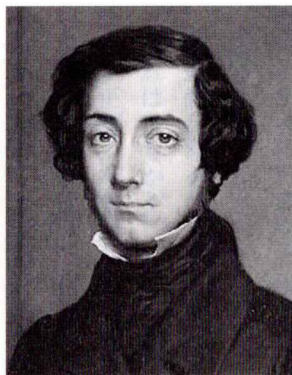
たとえば、ある人が「ワクチンは危険だ」という投稿に「いいね」をつけたとするとアルゴリズムは、この利用者を「ワクチン批判に関心がある」と判断し、同様の投稿を次々と表示する。こうして批判的な情報だけに囲まれているうちに、「やはり多くの人

しかし、AIの支配者たち（ビッグ・アザー）は、我々に対して根源的に「無関心」である。幸福や不幸には関知しない。彼らが欲しいのは行動データだけである。我々が明日どこに行き、何を買い、何に反応するか。それを吸い上げることが目的である。企業は、人間のあらゆる経験を収奪し、蓄積し、商品に加工する。我々はそれをエサとして与えられ、管理されている。

以下、詳細を説明する。

デジタル・カルトの誕生

現代人は、自分が「檻」の中にいることに気づかない。なぜなら、それがあまりにも心地よいからだ。NetflixやYouTubeを開けば、「あなたへのおすすめ」が並ぶ。SNSのタイムラインは、自分と似た意見を持つ人々の投稿で埋め尽くされる。Google検索は、過去の検索履歴に基づき、利用者ごとに最適化された情報を提示する。



アレクシ・ド・トクヴィル

トクヴィルは言う。

「専制がこの世界に生まれることがあるとすれば、それはどのような特徴の下に生じるかを想像してみよう。私の目に浮かぶのは、数え切れないほど多くの似通って平等な人々が矮小で俗っぽい快楽を胸いっぱいに想い描き、これを得ようと休みなく動きまわる光景である。誰もが自分にひきこもり、他のすべての人々の運命にほとんど関わりをもたない。彼にとつては子供たちと特別の友人だけが人類のすべてである。残りの同胞市民はというと、彼はたしかにその側にいるが、彼らを見ることはない。人々と接触しても、その存在を感じない。自分自身の中だけ、自分のためにのみ存在し、家族はまだあるとしても、祖国はもうないといつてよい」

天才トクヴィルの目には二〇世紀どころか、二一世紀の状況も映っていた。

がそう考えているのだ」と確信する。しかし実際には、それは世界のごく一部にすぎない。有効性を示すデータは、アルゴリズムによって視界から排除される。

もはや、秘密警察も独裁者の肖像も要らない。不安に支配された人々は、「快適さ」を提供してくれる権力に判断を委ねる。

そこにあるのは、オルダス・ハクスリーが『すばらしい新世界』で描いたような、苦痛を伴わず、安心して依存できる幸福である。

かつての権力は命令する主体だった。

アルゴリズムは命令も強制もしない。

アルゴリズムには顔がない。

だから、人は抵抗する相手そのものを見失う。

一九世紀の思想家アレクシ・ド・トクヴィルは、近代社会が生み出す「穏やかな専制」を予見した。それは、暴力によって支配する旧来の専制でも、二〇世紀の全体主義でもない。快楽による統治である。

殺すのではなく、飼い殺す。

人々は、自ら進んで檻に入る。

「あなたへのおすすめ」という屈辱

以前、私は安倍晋三を批判するための資料として、関連書籍をネットで大量に買い込んだ。するとしばらくして、AmazonやYouTubeが「安倍晋三が日本を取り戻す」「奇跡の宰相・安倍晋三」「真の保守・安倍晋三」みたいな「おバカ本」や「アホ動画」を次々と「おすすめ」してきた。どうやら私は、「安倍信者」として処理されたいらしい。屈辱だよ。

関連商品をクリックしただけなのに、文脈抜きに人格を否定された。

それはともかく、「おすすめ（レコメンド）」機能は危険だ。行動履歴から導き出された「正解」を先回りして知らせることにより、人間の精神を過去に縛り付ける。かつては本を買ったり映画を観たりするのは一種の賭けだった。選んだものがくだらなかったら、カネと時間をドブに捨てた自分に腹を立てた。批評眼も審美眼もこう

して育つ。失敗する機会を失った人々は、人生を失敗する。

こうした社会では代議制は成り立たない。なぜなら「民意」は有権者の熟考の結果ではなく、AIが生み出すものになっているからだ。ここにも主体の問題がかかわってくる。

かつての世論操作は、新聞社やテレビ局などのマスメディアを掌握することが必要だった。政治家はメディアのトップと会食を重ね、エサを与えて懐柔し、人事に介入した。

この構造をAIは破壊した。いまや懐柔も恫喝も必要ない。

二〇一六年の米大統領選挙では「ケンブリッジ・アナリティカ」が暗躍した。彼らはFacebookのユーザーデータを不正に収集し、性格、趣味、嗜好、深層心理にある恐怖心を分析、それぞれに最適化された広告、政治的メッセージを送りつけた。ある者には「移民の脅威」を、別の者には「経済的不安」を強調した。

これは「マイクロターゲティング」と呼ばれる手法だ。AIは動物としての人間を分析し、効率的に感情を動かす。人間は無意識のうちに、特定の候補者に投票するよ

うになる。

日本でもその流れは進んでいる。

選挙前になればアルゴリズムによりユーザーごとにカスタマイズされた政治広告が大量に流れてくる。

また、「バンドワゴン効果」を利用した世論操作も行われている。人間は多数に同調し、勝ち馬に乗ろうとする傾向がある。特定の政治家やイデオロギーを支持するアカウントを大量につくり、SNS上で一気に投稿すれば、それが社会の大多数の意見であるかのように偽装できる。

このカラクリが露呈したのがDappi事件だ。

自民党にとって有利になるデマをSNSで流していた匿名アカウントDappiは、「普通の日本人」と自称していたが、その正体は東京のウェブ関連企業「ワンズクエスト」だった。名誉毀損訴訟の判決により、これらの投稿が同社の業務として行われていたことが認定された。

世論が捏造されれば、悪党の天下になり、国は亡びる。その結果、人が死ぬ。

事件発覚後、ワンズクエストは沈黙し、自民党はこの問題を闇に葬ろうとしている。オーウェルは『一九八四年』で近未来のディストピアを描いた。平和省は戦争を、豊富省は搾取を、真理省は改竄を、愛情省は拷問を司る。真理省は「戦争は平和である」「自由は隷属である」「無知は力である」と主張する。

主人公ウィンストンは、真理省で働き、過去の新聞記事を改竄する仕事をしている。政府の発表と矛盾する記事を見つけると、それを書き換える。

安倍政権下ではほぼ同様のことが行われた。

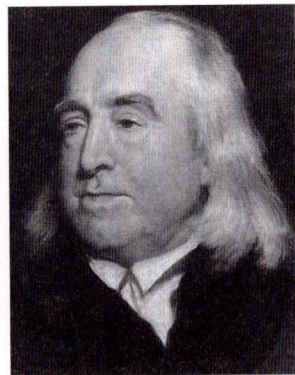
森友事件における財務省の公文書改竄、南スーダン国連平和維持活動(PKO)における防衛省の日報隠蔽、裁量労働制における厚生労働省のデータ捏造、入管法(出入国管理及び難民認定法)改定に関する法務省のデータごまかし、国土交通省による基幹統計の書き換え……。省庁をまたがる大規模な不正が発覚したにもかかわらず責任がうやむやになっている。

パノプティコンと内なる看守

「最大多数の最大幸福」を掲げた功利主義者ジェレミ・ベンサムは「パノプティコン」を考案した。それは中央の監視塔と、それを円環状に取り囲む独房で構成される。監視塔からはすべての独房が見渡せるが、独房の囚人からは監視塔の中が見えない。ここにあるのは「視線の非対称性」だ。重要なのは、実際に看守がいるかどうかではない。囚人は「常に見られているかもしれない」という意識を持つことで、看守が不在であっても、自らの規律を正すようになる。ベンサムはこれを、権力を自動化し、最小のコストで最大の秩序を生む装置として構想した。

これを進化させたのがAIによる支配だ。

私は今、「Googleドキュメント」を使って、この原稿を書いている。これほどの皮肉はない。AIによる監視社会を批判する文章を、そのプラットフォーム上で書いて



ジェレミ・ベンサム

いるのだから。

「Googleドキュメント」には保存ボタンがない。ショートカットで「コントロール+S」を押す必要もない。キーボードに打ち込んだ記録は、瞬時にクラウドへ吸い上げられる。Geminiも、もしかしたら私がGoogleを批判していることを本社にチクっているかもしれない。ためにGeminiに聞いてみると「そ

もしれない。いつ寝首を搔かれるかわからない。た

しかし何度も言うように、問題は実際に監視されているかどうかではなく、「監視されている」と感じるかどうかである。ベンサムのパノプティコンをフーコーは「まなざしの内面化」と捉えた。

バカの勝利

一九九七年にジャーナリストの立花隆が『インターネットはグローバル・ブレイン』を書いたとき、私は将来「グローバル・ブレイン」になると予測した。世界も知性も「ブレイン（平原）」になっていく。インターネットは人類の知のあり方を変えた。いいほうにも悪いほうにも。大多数の人間はそこにゴミを投げ捨て、環境破壊を引き起こした。川に毒を含んだ廃水を流した結果、「奇形児」も増えた。

二〇二四年の時点で、Googleの検索性能が著しく低下しているという指摘が世界中で相次いだ。ドイツの研究チームは、検索上位はアフィリエイト目的のスパムサイトに占拠されていると指摘。「ピンク・スライム」と呼ばれる信頼性の低いニュースサイトも急増した。米「ニュースガード」によれば、AIが自動生成したこれらのサイトの数は膨れ上がっており、その中身は他のメディアの記事のパクリやデマの再構

成である。

SNSは、インプレッション稼ぎのゾンビ・アカウントであふれている。AIが作ったコンテンツをAIが消費し、アルゴリズムだけが回る虚無の空間においては、人間が取材し、思考して書いた記事は、「安価なゴミ」の下に埋もれていく。

二〇二三年、AmazonでAIが書いた「キノコ狩りガイド」が販売され、毒キノコを推奨する記述が見つかり回収騒ぎとなった。機械に良心はない。逆に言えば、良心をなくせば機械になる。ナチスのアイヒマンのように。

カネ目当ての乞食作家は、偉大な精神の遺産を切り刻み、水で薄め、新しい表紙をつけて売りさばく。AIに適当な文章を生成させ、それを電子書籍にする。タイトルは検索されやすいキーワードを詰め込んだもので、「ChatGPT完全攻略マニュアル」「AI副業で月収一〇〇万円」といったものが多い。中身は当然、「ゴミ」である。ChatGPTに「ChatGPTの使い方」を教えてもらい、返ってきた答えをそのままコピーする。百田尚樹のコピペ本『日本国紀』よりひどい。百田の本ならブックオフに並べば一〇〇円の値が付くが、AIの電子書籍は一瞬で価値がなくなる。こうした面においては

AIは文豪百田のエレガントで高尚な文章に勝つことはできない。バカが高く評価するという点においては同じだが、それは百田の頭のように不毛である。

「本物」の不在

近年、音楽の分野で興味深い実験結果が報告されている。AIが作った曲と、人間が作った曲を、作者を伏せて一般のリスナーに聴かせ、どちらが「良い曲」かを判定させるブラインドテストだ。多くのケースで、AIが作った曲は人間と同等、あるいはそれ以上の高評価を叩き出す。実際、二〇二四年に高性能な音楽生成AIが一般公開されたときは、「もはや人間は不要だ」と言われた。

しかしここには罠がある。それは脳にとって負担のない「処理のしやすさ」、つまり「心地よさ」にすぎなかった。AIは過去の膨大なヒット曲のデータを学習し、「統計的に多くの人が好むコード進行やメロディ」をつなぎ合わせる。したがって、AI

第3章

家畜による家畜のための民主主義



イーゴリ・ストラヴィンスキー

が作る曲は、「どこかで聴いたことがあるような曲」になる。テレビの歌番組が垂れ流すクソみたいな曲が、AIの出す「正解」である。

名曲はその対極にある。聴衆を最後まで安心させない。

ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルトが音符の間に忍ばせた狂気や、イーゴリ・ストラヴィンスキーの「リズムの狂い」は、AIからは生まれない。そこにしか音楽の価値はない。当たり前だ。芸術は統計的平均を深く軽蔑するものなのだから。

最短距離が奪うもの

私は大学生の頃、渋谷でアルバイトしていた。レコード屋を梯子し、大盛堂書店で立ち読みし、猿樂町にあった中華料理屋で食事をした。センター街はロン毛のクソガキやコギャルが集まる掃き溜めのような場所だったが、それでも人間臭い磁場があり、身体的な記憶として残っている。

生活圏が変わり、渋谷にはほとんど行かなくなったが、先日、十年ぶりに渋谷駅で降りた。そこは、私の知る渋谷ではなかった。駅周辺は大規模な再開発により、迷宮のようになっている。私は迷子になり、約束の時間に遅れそうになった。現在、山手線の各駅が作り変えられている。そこには、どこにもあるコーヒーストップや、どこにもある高級スーパ―が入っている。渋谷駅と新宿駅を丸ごと入れ替えても、誰も不便しないだろう。再開発という名の下に、その土地が持っていた歴史や匂いは排



エルンスト・ユンガー

快適さは毒である

人生は無駄だが、無駄とはいき切れない。AIには、その機微がわからない。

軍人で作家のエルンスト・ユンガーは、近代社会の本質を「痛みの排除」に見出した。彼によれば、ブルジョア社会（市民社会）は「安全」を至上の価値とし、痛みを

技術的に処理すべき「エラー」として扱う。

頭が痛ければ鎮痛剤を飲み、精神が病めばカウンセリングで修復し、社会的な摩擦はマニュアルで回避する。こうして痛みを身体から切り離し、客観的な対象として管理すれば、生の手応えは希薄になる。筋肉は繊維維を破壊することで肥大するし、精神は葛藤と苦悩

除され、街は代替可能なものになる。地方都市の駅前も、金太郎飴のように均質になってきた。目印となる「異物」が消えれば、人間は直感や身体性を失っていく。

私はよく散歩をする。初めて降りる駅や、外国で散歩するのは特に楽しい。道に迷っても、スマホの地図アプリは見えない。散歩の勘が鈍るからだ。目的地に向かうだけの方向を予測し、よそ見をしながら進み、大きく間違えたら引き返せばいい。その過程は重要だ。タクシーに乗ってしまったら、ほとんど何も残らない。

実際、よく覚えているのは、旅行中のトラブルばかりだ。パリの北駅で、黒人の少年に小銭入れを盗まれたことがある。両替のときに一瞬目を離れた隙に、見事にやられた。少し離れた場所にいた少年は、何とも言えない、うらめしげな表情でこちらを見ていた。ほとんど小銭が入っていなかったのだろう。私は「もう少し入れておいてやればよかったな」と思った。その感覚と少年の表情は、パックスツアーでは決して得られない。

これは極端な例だが、「予測不能な事態」を排除し、地図アプリが示す最短ルートだけを進めば、「偶然」や「出会い」は消滅する。無駄なことは無駄ではないのであり、

により成熟する。AIやVR（バーチャルリアリティ）が提供するのは、こうした「抵抗」が除去された世界である。

「VRの父」と呼ばれる計算機科学者のジャロン・ラニアーは、SNSやAIのアルゴリズムは、人間を「行動変容」させるために設計されたと暴露した。

家畜はスマホを通して飼育される。

哲学者のジャン・ボードリヤールは、湾岸戦争はテレビ画面の中だけの出来事であり、現実には起きなかったという逆説的な議論を展開した。ミサイルの着弾はビデオゲームの映像のように処理され、そこにあるはずの「死」や「痛み」は隠蔽された。匿名性と距離が理性のタガを外し、画面の向こうの「敵」を生身の人間として感じられなくなる。その極端な形は、現在、ガザの映像に向かって投げつけられる言葉の洪水に見ることができる。

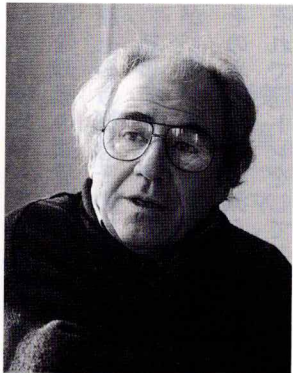
逆に言えば、「痛み」は現実には踏みとどまるための武器になる。たとえば不快なことをわざとずる。

神楽坂に「伊勢藤」という古い酒場がある。そこにはクーラーがない。真夏の猛暑

日でも、客たちは汗をかきながら、燗酒を飲んでいる。AIなら狂気と判定するだろう。しかし、文化は狂気の中にある。

ニーチェは身体を近代に対する砦と考えた。小さな理性（精神）は、身体という「大いなる理性」の道具にすぎない。その主従関係を逆転させ、道具である精神が主人である身体を殺そうとしているのが、現代であると。そこでは人間は現実感覚を失い、イメージの世界に幽閉される。

では「現実」とは何か？



ジャン・ボードリヤール

それは個々の身体が生み出したものだ。これがニーチェの「権力への意志」という言葉が意味するものである。今の世界は病人（高貴な道徳の否定と奴隷による価値転換の帰結）が生み出したものであり、我々は世界を人間の手に取り戻さなければならないというわけだ。

おわりに バベルの図書館

バベルの塔は、神に届くことなく崩壊した。

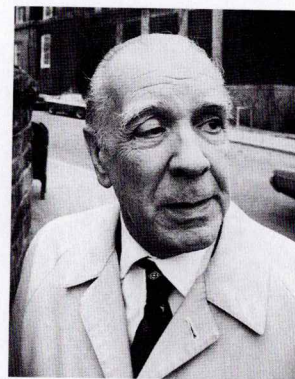
言語を獲得した人間は、世界を言語としてしか把握できなくなった。

ホルヘ・ルイス・ボルヘスの『バベルの図書館』では、人間は無限の無意味な本に

阻まれ真実に辿り着けなくなる。そこでは真実の本と嘘の本の見分けはつかない。

哲学者のルートヴィヒ・ウィットゲンシュタインは「語りえぬものについては、沈黙せねばならない」と言った。

でも問うても意味がないことを問うのが人間である。



ホルヘ・ルイス・ボルヘス

そして主体にしがみつく。その努力は無駄だ。
ひとつだけ確かなことがある。
我々は、すでに飼い殺されている。

適菜収

参考文献

- 『ニーチェ全集』(ちくま学芸文庫)
- 『言葉と物』ミシェル・フーコー／渡辺一民・佐々木明訳(新潮社)
- 『監獄の誕生』ミシェル・フーコー／田村俤訳(新潮社)
- 『フランス革命についての省察』エドモンド・バーク／水田洋・水田珠枝訳(中公クラシックス)
- 『正統とは何か』G・K・チェスタトン／安西徹雄訳(春秋社)
- 『大衆の反逆』オルテガ・イ・ガセツト／神吉敬三訳(ちくま学芸文庫)
- 『全体主義の起原』ハンナ・アーレント／大久保和郎・大島かおり訳(みすず書房)
- 『自由からの逃走』エーリッヒ・フロム／日高六郎訳(東京創元社)
- 『歴史とは何か』E・H・カー／清水幾太郎訳(岩波新書)
- 『読書について』ショーペンハウアー／鈴木芳子訳(光文社古典新訳文庫)
- 『ゲーテ形態学論集・植物篇』木村直司編訳(ちくま学芸文庫)
- 『ベンヤミン・コレクシオンI』ヴァルター・ベンヤミン／浅井健二郎ほか訳(ちくま学芸文庫)
- 『一九八四年』ジョージ・オーウェル／高橋和久訳(ハヤカウェイ文庫)
- 『すばらしい新世界』オルダス・ハクスリー／黒原敏行訳(光文社古典新訳文庫)

- 『アメリカのデモクラシー』トクヴィル／松本礼二訳(岩波文庫)
- 『群衆心理』ギュスターヴ・ル・ボン／桜井成夫訳(講談社学術文庫)
- 『死にいたる病／現代の批判』キルケゴール／梶田啓三郎訳(中公クラシックス)
- 『民族とナショナリズム』アーネスト・ゲルナー／加藤節監訳(岩波書店)
- 『グリーンバグ批評選集』クレメント・グリーンバグ／藤枝晃雄編訳(勁草書房)
- 『存在の耐えられない軽さ』ミラン・クンデラ／千野栄一訳(集英社文庫)
- 『湾岸戦争は起こらなかった』ジャン・ボードリヤール／塚原史訳(紀伊國屋書店)
- 『文明化した人間の八つの大罪』K・ローレンツ／日高敏隆・大羽更明訳(思索社／新思索社)
- 『監視資本主義』シヨヤナ・ズボフ／野中香方子訳(東洋経済新報社)
- 『マクドナルド化する社会』ジョージ・リッツア／正岡寛司訳(早稲田大学出版部)
- 『伝奇集』J・L・ボルヘス／鼓直訳(岩波文庫)
- 『啓蒙の弁証法』マックス・ホルクハイマー／テオドル・W・アドルノ／徳永恂訳(岩波書店)
- 『増補版』政治における合理主義』マイケル・オークショット／嶋津格・他訳(勁草書房)
- 『スーパーインテリジェンス』ニック・ボストロム／倉骨彰訳(日本経済新聞出版)
- 『フィルタバブル』イーライ・パリサー／井口耕二訳(ハヤカウェイ文庫NF)
- 『インターネットはグローバル・ブレイク』立花隆(講談社)
- 『決定版 三島由紀夫全集』(新潮社)

適業収 (てきな・おさむ)

作家。1975年山梨県生まれ。ニーチェの代表作『アンチクリスト』を現代語にした『キリスト教は邪教です!』『ゲーテの警告 日本を滅ぼす』『B層』の正体『ニーチェの警鐘 日本を蝕む』『B層』の害毒『ミシマの警告 保守を偽装するB層の害毒』『小林秀雄の警告 近代はなぜ暴走したのか?』(以上、講談社+a新書)、『日本をダメにしたB層の研究』(講談社+a文庫)、呉智英との共著『愚民文明の暴走』(講談社)、『安倍でもわかる政治思想入門』(安倍でもわかる保守思想入門)『国賊論 安倍晋三と仲間たち』『日本人は豚になる 三島由紀夫の予言』(中野剛志との共著)『思想の免疫力』(以上、KKベストセラーズ)、『ナショナリズムを理解できないバカ』『小学館』、『ニッポンを蝕む全体主義』(安倍晋三の正体)『自民党の大罪』(以上、祥伝社新書)、『保守思想』(大全 名著に学ぶ本質)、『バカと戦うためのゲーテの教え』(以上、祥伝社)など著書60冊以上。『適業収のメルマガジン』も配信中。

AIは人間を殺さない、飼いか殺す 全体主義という心地よい檻

ベスト新書

022

二〇二六年五月七日 第一刷発行

著者◎適業収

発行者◎鈴木康成

発行所◎KKベストセラーズ
東京都文京区音羽一・一五・一五シティ音羽二階 〒112-0013
電話 03-6304-1832(編集) 03-6304-1603(営業)
<https://www.bestsellers.co.jp>

装丁◎竹内雄二
校正◎東京出版サービスセンター
写真◎アフロ、朝日新聞社
印刷製本◎錦明印刷
DTP◎三協美術

©T ekina Osamu, Printed in Japan 2026
ISBN978-4-584-12622-6 C0295

定価はカバーに表示しております。乱丁、落丁本がございましたら、お取替えいたします。
本書の内容の一部あるいは全部を無断で複製複製を「コピー」することは、法律で認められた場合を除き、著作権及び出版権の侵害になりますので、その場合はあらかじめ小社あてに許諾を求めてください。